

恩師 濱本英次先生の思い出

川崎医療短期大学 学長 守田 哲朗

平成9年9月4日、岡山大学名誉教授、濱本英次先生は、肝臓がんのため享年94歳で亡くなられた。その日から早くも10年が過ぎたが、ご生前、小児科医の集りなどで伺った豊富な話題で含蓄のあるお話が今でも懐かしく思い出される。

私は、昭和30年岡山大学医学部小児科学教室に入局した。当時、先生は、翌年の日本小児科学会の宿題報告「ギラン・バレー症候群を呈する一多発性神経根炎について」を担当しておられ、その準備に教室を挙げて没頭されていた。お陰で、新入局の私どもは、入局早々から多くの患者を受け持たされた。今と違って、ポリオや日本脳炎、赤痢などの急性伝染病の発生が多かった時代であり、よい勉強をさせていただいた。

回診時の先生は、厳しく、よく叱られたという話を諸先輩から聞いていたが、この頃の先生は、宿題報告の準備に忙しかったせいか、ひどく叱られた記憶はない。ポリオやギラン・バレー症候群の患者には時間をかけて丁寧に診察されていた先生のお姿が目につく。

この年の夏、あの粉乳砒素中毒事件が発生した。患者の臨床症状と剖検所見とから砒素中毒症を疑い、法医学教室に依頼した粉乳から砒素が検出され、そして、これらの事実を報道関係者に公表されるまでの先生のご苦悩は大変なものであった。先生のご逝去の年、平成9年は日本小児科学会の創立100周年に当り、記念誌「小児科学会の百年」が刊行された。先生は、砒素中毒症の発見時の経緯について執筆されており、病理所見の報告から砒素中毒発表までの3日半の苦悩を「現在の社会常識からみて、随分手ぬるいとお叱りをいただくかたのあることを

よく承知しております。しかし当時の社会常識の中の出来事であり、これで精一杯のことでした」とおっしゃっている。

事件について発表された翌朝には小児科病棟2階にあった外来受付から1階を経て建物の外まで患者を抱いた家族の列が続いたこと、治療にはBALが使われたが、その使用開始により患者の食欲、機嫌、睡眠などの一般症状が急速に改善したこと、病室中に強烈な硫黄臭が充満したことなども忘れられない思い出である。

私の学位論文も砒素中毒症と関連がある。翌31年1月、教授室に呼ばれ、「今回の砒素中毒症の症状は粉乳中の砒素含有量から推算した摂取量からすると軽すぎると思える。もし、そうだとすると、粉乳中に混入した砒素は患者の口に入る前に乳汁蛋白質SH基とある程度結合して弱毒化されていたのではなからうか。これをポーラログラフを使って検討しよう」といわれ、テーマをいただいた。

実験の準備にかかった矢先、私が4月から広島県立病院へ出向することが決まった。重なる時は重なるもので、文部省総合研究「有機チオー



濱本英次先生

ル化合物による解毒」研究班が組織され、先生は研究を分担されることになり、そのお手伝いも広島ですることになった。広島県職員であったので、広島県衛生研究所でポーラログラフを使わせてもらい、ほとんど毎日、午後、あるいは夕方から研究に出かけた。班会議は年3回あり、先生のご指導は手紙か電話であった。「いついつ迄にデータをまとめて」と、かなり日が迫った無理な指示もあったが、一方では、班会議の前々日頃、先生ご自身が広島に来られて成績の説明を聞き、発表に使う掛図（当時はスライドでなく、掛図を使用）を持ち帰られていた。「私が行くから、君は来なくてよい」とか、「私の行くことは病院関係者に内緒だよ」といった連絡のあるたびに、研究のことでこれ以上病院に迷惑をかけたくないというお気遣いが強く感じられ、恐縮したものである。

昭和30年頃のわが国では乳児の70%以上が完全母乳栄養であった。それが急激に減少し始め、わずか10年後の40年頃には30%前後になってしまった。当時、日本小児科学会栄養委員会の委員長であった先生は、この事態を大変憂慮され、この一因が施設分娩の増加と新生児室への育児用粉乳の進出にあると強調された。そして新生児期に安易な粉乳の使用は戒められるべきであるとして、「母乳栄養を勧む」と題した委員会勧告をまとめられた。勧告文は、先生独自の風刺的表現を交えて書かれており、小児科学会百年の歴史に残る名文であったと思う。この頃から母乳栄養の価値を再評価する動きがWHOを中心に世界各国において活発になったが、先生の書かれた委員会勧告は、わが国における動きの走りであったといえよう。

岡山大学小児科には医学教育と乳児栄養研究の目的で健康乳児のみを出生直後から誕生まで1年間哺育する乳児室が設置されていた。私は、乳児栄養の研究で先生のご指導を受けただけに、乳児室とのかかわりが長く、数多くの思い出がある。乳児室では、哺育乳児1名ごとに受持医1名、3名ごとに看護婦1名が付き、毎日受持医により乳児の健康状態と栄養摂取状況が

記録されていた。回診時に体重とエネルギー、蛋白質、水分などの摂取量の推移を大きなグラフ用紙にプロットして見ていただくのであるが、体重の増えない状態が続く場合、主治医はその理由を聞かれ、返答に窮すると、さんざん絞られた。回診後「この親不孝め」と受持ちの乳児に当たる主治医の姿をしばしば見かけたものである。発熱した乳児がいた場合、真夜中に当直医に電話があり、容態を聞かれる。うっかり診ていなかったものなら激しい雷が落ちた。

先生のお孫さんが乳児室に入室された。両親が1年間位アメリカに出張されたためである。私が主治医になったが、ほかの乳児同様、乳児栄養の研究の被験者になってもらった。順調な発育ぶり、主治医を困らすことは皆無であった。回診の時、婦長さんが「抱かれますか」というと、「そうやな」と抱き、嬉しそうにあやしておられた。大きなマスクはしておられたが、そのお姿はどこにでもある好好爺そのものであった。

多くの功績と思い出を残した乳児室であったが、先生の退官後間もなくして（昭和45年頃）、健康乳児の哺育に看護婦を定員として割当てるのはおかしいという理由で廃止されてしまった。返す返すも残念に思ったが、これと時を同じくして、私の岡山大学における乳児栄養の研究も終りの日を迎えることになる。

先生は、昭和44年3月31日、岡山大学を定年退官された。その際、刊行された退官記念業績集で、先生は、「研究の思い出」と題して乳児栄養への関心についても触れておられ、「もともとこれは粉乳栄養が急に増大して来たことに対する心の反応といったものでした。次の世代の代謝形態を刻印して行く粉乳、そんな意味で日本の粉乳がよく事態に込んでいるか、どうか、これに対する危惧の念から出発しております。これは非常に困難の多い仕事ですが、誰かがチェックしていないと製品が偏向してしまいます。そうなのは大変だと考えたからです。しかし、その志は現在までまだ全く満たされてはおりません」と述べておられる。このことは後

に続く私ども小児科医に対する重大な警鐘であり、深く肝に銘じなければならない。 て終わりにする。

この後、先生は香川県立中央病院院長を4年間勤められ、昭和48年4月から新設の川崎医科大学に移られて小児科の初代教授に就任された。私も同年9月から助教授として再びご指導を仰ぐことになった。この頃は、激しかった学園紛争はもう下火となっていたが、医学教育、とくに臨床医学教育はその理念が問われ、教育内容と教育方法の改革が要求されている時代であった。川崎医大においても新しい教育方針、つまりブロック講義と病棟実習を主体にした臨床教育を行うということで、水野祥太郎学長を中心に教員一同、その準備から実施へ移るため会議の連続であった。先生は、「もう歳だから、新しいことは若い君達にまかせるよ」とおっしゃって会議へのお出ましは少なかったが、その前後にご意見を伺うと、豊富な体験に基づく鋭いご指摘を多くいただき、有益であった。また、昼休みなど、折に触れての先生のお話は、私ども教職員にとって忙しい中での一服の清涼剤でもあった。

先生は、昭和51年3月で川崎医大を惜しまれながら勇退された。その年、川崎医大には大学院医学研究科が設置され、私は、小児栄養学講座を担当し、岡山大学時代と同様、乳児栄養の研究に力を注ぐことになった。ただ、健康乳児を対象とした長期間の哺育での研究はできなくなったので、比較的大きい、つまり成熟乳児に近い低出生体重児を対象を選んで、短期間の哺育で研究をした。乳児の蛋白質所要量の研究が主であったが、ほかにタウリンやNPN（非蛋白質態窒素）、n-3脂肪酸などを強化した育児用粉乳を試作し、それらの栄養学的効用を調べたりした。絶えず、先生の教訓を念頭に置き、ご期待に沿うよう努力したつもりである。

先生は90歳を過ぎられてからも、新刊の書物を次々と読破され、その内容を独特の話術で私どもに講話された。私は、岡山大学小児科入局以来、公私ともに長くお世話になっただけに、思い出は尽きない。謹んで、先生のご冥福を祈っ